

新緑がまぶしい季節を迎え、ウォーキングには最適です。
現在会員登録数 3,768 人さま。次号は 6 月 18 日発行の予定です！

+-+-----+ ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----+ +

【1】お知らせ

【2】コラム

- 《1》ふくろう庵ときどき
- 《2》この本読んだ？
- 《3》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する
- 《4》子どもの本の珠玉のことば
- 《5》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

+-+-----+ +

■ ----- ■
【1】お知らせ

● オンライン国際講演会「ことばを超えてー絵で物語る」

世界を代表する絵本作家、デイヴィッド・ウィーズナーさんとショーン・タンさんの対談を字幕付きで配信します。(約2時間)

◎ 6月12日(日)まで視聴期間延長! ◎ 視聴料: 1300円

※お申し込み(Peatix) → <https://wiesner-tan-2.peatix.com>

● オンライン講座「2021年に出版された子どもの本から」

2021年に出版された子どもの本約300冊をテーマやジャンル、年齢別に紹介し、現在の子どもの本の傾向について考えます。(約3時間)

◎ 講師: 土居安子(当財団総括専門員)

◎ 視聴期間: 5月6日(金)~12月15日(木) ◎ 視聴料: 1000円

※お申し込み(Peatix) → <https://2021kodomonohon.peatix.com>

● 寄付金を募集しています

当財団は、子どもの文化を振興し、子どもと本をつなぐ活動を充実させるために活動しています。その活動をより充実させるために、皆さまからのご寄付を継続的に募っています。クレジットカードもご使用可能です。ぜひ、ご協力くださいますようお願いいたします。

* 年間1万円以上のご寄付でイイクロちゃんグッズをプレゼントしています。

詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

Syncable → <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/channel/UCgPj7D2ReQ0J03zhMMLfuIA>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/m1_youtube/index.html

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム



《1》 ふくろう庵ときどき 1

「紫色の輪ゴム」 三宅興子（当財団特別顧問）

万博公園にあった大阪国際児童文学館が東大阪市にある大阪府立中央図書館内に引っ越してきてその振興財団の理事長を引き受けたとき、「日産 童話と絵本のグランプリ」の童話の審査員もその役職に含まれていました。創り手の立場に立ったことのなかった私は、ドキドキして動揺していました。

しかし、あまんきみこさんと松岡享子さんによる、「こうすれば、子どもにわかる」といった、非常に具体的で「なるほど」と説得力のある、熱のこもった、厳しい中に前向きにすすめる指導を受けた受賞者たちは、その表情からきちんとそのアドバイスを受け止めて、興奮気味になり、幸せな気持ちになっていかれているのわかりました。そして、それを聞いていた私も一字もおろそかにできない童話の世界の奥深さをあらためて認識したのでした。

横浜の日産本社での表彰式のときです。表彰式の前に受賞者に対して作品を講評するセミナーが行われますが、その指導が済んで部屋に戻ると、いつものように「豪華なお弁当」が用意されていました。そのときのお弁当は美しい「紫色の輪ゴム」で留められていました。初めてみたその輪ゴムの色に魅せられて私は、そっと、輪ゴムをはずしてテーブルの上に置きました。ふと見ると、あまんきみこさんと松岡享子さんも同じことをなさっていました。私も素知らぬ顔をしていましたが、吹き出しそうになりながら「紫色の輪ゴム」を宝物のようにそっと持ち帰りました。

松岡享子さんとは、ハウスも衣装も手作りした「人形ごっこ」という共通体験をおしゃべりすることになっていましたのに、先に逝かれてしまいました。残念でなりません。

* 当財団特別顧問 三宅興子さんにエッセイを寄せていただきました。不定期連載の予定です。

《2》 この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『カメレオンのレオン ないしょの五日間』岡田淳/作 偕成社 2022年5月
対象年齢：小学校中学年以上

- * 今回のゲストは当財団の宮川健郎理事長（T）です。
- * 作品の結末まで書かれています。

あらすじ：桜若葉小学校のある世界とパラレルワールドであるサクラワカバ島の住人で、どんな姿にも変身することができるカメレオンの探偵レオンが両方の世界で活躍するシリーズ「カメレオンのレオン」3作目。サーカスに出演しているうさぎの兄弟が高く飛ぶ能力を桜若葉小学校の子どもに渡してしまったという「ピヨンの魔法」、レオンがうっかり、桜若葉小学校のクスノキの幹から出てくるのを小学生に見られてしまった「レオン、うっかりする」、変身と人の心を読むことができる能力を持ったスバルが、桜若葉小学校の恭太郎に変身したまま、元の姿に戻らないという問題を解決する表題作、おまけの一話が入っている。

Y : 「カメレオン」シリーズ3 作目です(注)。

T : 第一話「ピヨンの魔法」は、レオンが担当した最初の事件です。この作品を通して、レオンが探偵になった経緯や同じ宿屋に住んでいて島の高校で歴史を教えているヒキガエルのヒキザエモンとの関係などがわかるようになっていきます。

Y : 桜若葉小学校中の子どもが校長先生に変身したレオンに向かって「ピヨーン！」と言う場面は、絵になると思いました。とはいえ、校長先生に言われたとおりにしない子どももいるということがちゃんと書かれていて、うれしくなりました。

T : そして、第三話「ないしょの五日間」は、読み応えたっぷりで、深い作品だと思います。

Y : まず、おもしろいのは、謎解き。レオンの調査によって、どうして恭太郎は元の姿に戻れないのかがわかってきます。

T : 実は、恭太郎はスバルに戻れないのではなく、二人が入れ替わっていて、桜若葉小学校の側には恭太郎に変身したスバルがいました。

Y : そう。そして、スバルは、恭太郎の両親にもし、自分に人のことが読み取れる能力があっても手を握ることができるかと聞きます。すると、お母さんが「なにもかも知られちゃうのは、ちょっとね。でもね、お母さんが恭太郎のことをどう思っているかってことについては、よみとってもらってもいいって思っているわよ。」(p.153) と言い、お父さんも同意します。スバルはこの両親の率直な答えから、人のプライバシーについて思いいたします。

T : これは、恭太郎の両親が子どもを対等とみていることと、息子への100%の愛情を示した答えです。そういう意味でスバルの両親は、息子を庇護する対象としてしか見ていませんでしたが、この事件をきっかけに変わります。

Y : 『カメレオンのレオン ないしょの五日間』は、同じ作者の「こそあどの森」シリーズの番外編『こそあどの森のおとなたちが子どもだったころ』(理論社 2021年5月)といっしょで、過去を振り返る話です。

T : ちょうどぼくもそれを考えていました。どちらの作品も、著者が作った独自の世界を再確認していく作品で、2つの作品によってそれぞれの世界のあり方がはっきりしたように感じます。心に残りました。

(注) 桜若葉小学校を舞台にした作品はほかにもあります。

<https://www.kaiseisha.co.jp/books/9784035405405>

《3》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第81回「或る農学生の日誌」

教員として、生徒として

題名の通り、ある農学生の足かけ3年に渡る日記を公開するという形式の作品です。〈序〉に続き、〈一九二五、四月一日 火曜日 晴〉という日付から始まり、〈一千九百二十七年八月二十一日〉で終わります。

4月当初、農学校3年になり、新しい学期を迎えた〈ぼく〉は、まだ1年生がおらず、上学年もない張り合いがない日々を過ごしています。教科書がこないため、さまざまな実習をこなしながら、天候不順による水不足を克服すべく、肥料設計や測量技術を活かした近代的農業へ活路を見いだす覚悟を語ります。

その後、厳しい生計のなか、修学旅行に行けるかどうか家庭内での重苦しい

やりとりが描かれます。最終的に父から許可され、〈ぼく〉は青森から北海道をまわる旅行での感激を伝えます。さらに、修身の授業に対する不満や疑念、土性調査のおもしろさ、良質な種籾を選別する方法である〈塩水撰〉と収穫量増の試み、樋番の折りに発見した水泥棒との諍いなどが綴られていきます。

しかし、〈ぼく〉のさまざまな近代的農法の実践は、ある8月の〈明方の烈しい雷雨〉のために挫折を余儀なくされます。村中の稲は悉く倒れ、〈もう村はどこももっとよくなる見込はないのだ。(中略)学校へ行ったってだめだ〉との失望・落胆が述べられます。

農学校に通う〈ぼく〉が近代農業をめざし、自然に挑む構図、そしてそれが容易でないことを描くのは、童話「グスコー・ブドリの伝記」や詩「一〇八八〔もうはたらくな〕」など他作品にも通じるところです。

一方で、学校教育を批判する視点が散見されるのも気になります。冒頭の〈序〉に、〈小学校の読本の村のことを書いたところ〉が〈じつにうそらしくてわざとらしくていやなところ〉だと語る箇所があります。国による、都会中心の教科書という教育装置を通して、地方はその実態とはかけ離れた中央に都合のよい存在になるよう強制されたことが暗示され、その嫌悪が露骨に〈序〉に表れているといえます。

賢治は自らの授業において、教科書を使用しなかったといいます。その理由は、〈教科書の内容は東京中心だから、稗貫地方にはあわない〉(佐藤成『証言宮沢賢治先生』1992年)。イーハトヴをこよなく愛し、教員として〈ほんとうの仕事〉を追い求めた賢治ですが、生徒の立場から農に向き合う姿を素描したのがこの日誌なのかもしれません。(ペ吉)

(本文の引用は、『宮沢賢治コレクション5 なめとこ山の熊』によりました。)

《4》子どもの本の珠玉のことば 35

ピチャピチャ、ピチャ……。

おかしな音はつづいている。先生はからだをうごかさないようにして、そっと音のするほうをさぐってみた。

ネコだった。一ぴきの白いネコが、子どもたちのつかう机の上において、さかんに机をなめているのだった。

先生がじっと見ているのも気づかぬようすで、ネコはひょいと、となりの机にとびうつり、そこでまたなめはじめる。

すると、ふしぎなことがおこった。ネコのからだの色が、かわりはじめたのだ。

(「図工室の色ネコー図工室ネズミの話ー」『放課後の時間割』岡田淳/作・絵 偕成社 1980年7月 p.89)

対談と同じ作者の作品です。私は小学校時代に岡田先生(と呼ばせてください)に図工を教えてもらったので、先生が『ムンジャクンジュは毛虫じゃない』(1979年8月)を出されたときは、とてもうれしく、図工の時間と地続きのような気持ちがしました。

『放課後の時間割』が出版されたときも、すぐに読み、そのあとも何度か読み直していますが、絵の具を食べていろいろな色になるネコというイメージが

強く頭の中に残っていて、ちょっとはげた絵を見るたび、色ネコが食べたのかなと思うようになりました。

岡田先生の作品には、学校が舞台の作品が多くありますが、どの作品も、「そうそう、こんな場所ある」「こんな子いる」と思わせてくれます。不思議なことが起こっても、それがとても自然で、「あり得る」と思わせてくれるのです。

加えて、必ず、ユーモアのセンスがあります。これも、図工の時間の先生の口調や、自由に楽しい授業内容とつながっています。

この作品は、図工の先生である「ぼく」がその学校で最後の学校ネズミに、学校ネズミたちの間で語り継がれてきた不思議な話を毎週1回聞くという設定です。「図工室の色ネコ」は、16章中、第9章になります。

私が図工で教えてもらったのも、作品から伝わってくるのも、「不思議」を見つけた心の大切さではないかと改めて思いました。(Y)

《5》 行って来ました！

市立伊丹ミュージアムで6月5日まで開催されている「「がまくんとかえるくん」誕生50周年記念 アーノルド・ローベル展」に行ってきました。「がまくんとかえるくん」を中心に、約30冊の絵本の原画、スケッチ、構想ノートなど約200点が6章に分けて展示されています。

展示の前半には、絵本作家アーノルド・ローベル(1933-1987)のいろいろな絵本や挿絵の原画などが展示され、それぞれの作品のキャプションには、作品とかかわるローベルの仕事や生涯についても解説があります。家族と過ごしている映像や写真からはローベルの人柄が感じられます。晩年に出版された、邦訳されていないマザー・グースや子どものための詩の本につけられた色鮮やかな絵は話を想像して楽しみました。

後半は、「がまくんとかえるくん」シリーズの原画やスケッチがたくさん展示されていました。話ごとにあらすじや作品に対するローベルの思いなどがわかるようになっていきます。個性の違う、がまくんとかえるくんの強い友情が感じられるいろいろな場面が楽しく、鉛筆で描かれた絵にやさしさや温かみを感じます。

今回の展示では特に、「がまくんとかえるくん」ができるまでの工程が紹介されている点がおもしろかったです。構想ノートには、ふたりが男女だったり、タキシード姿だったりする設定を試した絵や、お話のアイデア、ページ割りつけなどが描かれています。スケッチには、かえるくんたちのサイズや印象の違う絵、絵本に使われていない室内の絵などもありました。編集者とのやりとりで決まっていく様子は、メモなどがつけられています。絵本の原画は、印刷のために、墨版と、緑色と茶色のための色版に描き分けられていました。

最後のコーナーでは、加藤久仁生さんのがまくんとかえるくんを描いたアニメーション「一日一年」が上映されています。さまざまな作品のエピソードがつけられていて、セリフはないけれど、心地よい音楽が流れていて、がまくんとかえるくんの世界に浸りました。(K)

市立伊丹ミュージアム <https://itami-im.jp/>

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介
■ ----- ■

● 「庵野秀明展」

会 期：4月16日（土）～6月19日（日）

場 所：あべのハルカス美術館 入場料：有料

主 催：あべのハルカス美術館、朝日新聞社、読売テレビ

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント
■ ----- ■

今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『カメレオンのレオン ないしょの五日間』をプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガ N0.141 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ

office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は6月10日（金）、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

当財団が主催するイベント「おはなしモノレール」の打ち合わせで、大阪モノレールの万博記念公園駅へ。ツバメが飛んできたと思ったら、コンコースの高いところに巣がありました。小さなクチバシがたくさん見えます。この季節ならではの「子育て風景」に出会えて、すがすがしい気持ちになりました。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

